

小児科領域におけるきょうだい支援についての展望と課題

永田 雅子¹⁾ 三谷 真優²⁾ 川口 智子²⁾

はじめに

小児科に訪れる患児らの中には、身体の機能不全や発達障がい、重症の慢性疾患など、様々な疾患や障がいをもつ子どもたちがみられる。子どもの疾患や障がいは、患児である子ども本人に困難をもたらすのはもちろん、患児の家族らの生活や精神的健康にも大きな影響を与える。中でも、慢性疾患患児や障がい児を同胞にもつ健全なきょうだいは、同胞との関係の中から生じる直接的な影響に加え、親の関わり方や周囲の環境の変化に晒されることが多い。しかし、これまでの小児科医療の現場では患児の治療に重点が置かれ、きょうだいを含めた家族支援については十分検討されてこなかった。2000年代より小児科医療領域で小児療養環境の改善の必要性が指摘されるようになり、家族を含めた心のケアの必要性が検討をされるようになってきている。一方で、同胞が疾患をもつことのきょうだいの心理的影響については十分検討されてこず、現在も、小児科病棟で、入院児のきょうだい制限なく自由に面会できるのは21%にとどまり、全く認められていない病棟も8%にのぼる(田中・吉崎・桑原・平田・増子・藤村, 2012)など、病気になった同胞に家族の一員として病院で面会をしたり、心理的サポートを受けられたりするような体制は十分整えられていないのが現状である。

本研究では、小児科領域における患児のきょうだいの適応および支援に関する国内外の研究を概観し、きょうだい児支援の今日までの流れを明らかにする。その上で、現在の小児科領域で必要とされるきょうだい支援のあり方を考察する。なお、本研究では障がい児者および慢性疾患患児者を「同胞」、その健全な兄弟姉妹を「きょうだい」と表記する。

きょうだいへの影響

同胞が慢性疾患や障がいを抱えている場合、きょうだいには様々な影響が生じると考えられる。同胞の通院や治療のために、それまでの生活のパターンを変えざるを得ない事態が起こったり、疾患や障がいを抱えて生きていくことになる同胞に対して、周囲がさまざまな感情を揺さぶられたりすることは当たり前のことでもある。これまでの研究では、きょうだいへの影響については、同胞が“handicap”を抱えている場合、親の注意が同胞に向きやすくなること(Laboto, 1983)、きょうだいが自分の時間を障がいのある同胞にさかななければならないことによる心身の発達への影響が認められ、親との関係に葛藤を生じやすい(McHale & Gamble, 1989) ことなどが指摘されてきた。一方で、障がいをもつ同胞の存在がきょうだいに正と負の両方の影響を与えるとの報告もあり、Cleveland & Miller (1977) は、能力や自尊心についての感覚の高まりや、責任感が育まれる等の肯定的側面も認められることを指摘している。

Lobato (1983) は、きょうだいに影響を与える因子は単一なものではなく、同胞への影響は性別、出生順位、年齢、家族構成、家族を取り巻く心理社会的環境、家族の精神的健康など複数の因子が相互作用していると述べている。きょうだい構成に関する研究では、年下のきょうだいは世話をする役割が逆転することにより不適応を引き起こしやすい(Stoneman, Brody, Davis, Crapps, & Malone, 1991)、上に障がいをもつ同胞、下に弟または妹がいる3人きょうだいの真ん中の児は、弟、妹にも親の手がかかり、自分の気持ちを出しにくいという状況が生じやすい(立山・立山・宮前, 2003) など、影響要因として指摘した研究がある一方で、性別やきょうだい人数、きょうだい内の位置等の要因はきょうだいの不適応との関連は無いとする結果(原・西村, 1998)も存在するなど統一した見解は見出されていない。きょうだい研究では、年齢統制等の属性の統制が困難であることが方法論上の問題として指摘されてきており(Mates,

1) 名古屋大学心の発達支援研究実践センター

2) 名古屋大学大学院教育発達科学研究科

1990), 大瀧 (2011) はきょうだいに及ぼされる影響については、肯定・否定の二側面からのみでは計りきれないと述べている。笠田 (2013) は知的障がい者の中年期のきょうだいを対象に面接調査を行った結果、きょうだいのライフコース選択は一見多様に見えるが、同胞をサポートする方向へ社会的・文化的圧力を受けやすく、親から自由なライフコース選択を保障してもらうことで葛藤が解決される一方で、孤独感が解消されないと中年期まで葛藤が続くことを示している。

きょうだいの適応が思春期や成人期に破綻する場合があることも報告されてきた (西村・原, 1996)。きょうだいが家族の中で重要な役割を果たせば果たすほど、人生の岐路において、自分と障がいのあるきょうだいとの間で葛藤状態に陥り、自分が家庭から離れることは難しいと考えてしまうこと (山本・金・長田, 2000)、将来のケア責任を予想しながら、結婚や子どもを持つことにより一層慎重になる (笠田, 2013) ために女性のきょうだいは結婚が遅く、第1子の出産も遅い傾向にある (Hodapp, Urbano & Burke, 2010) など、ライフコースにわたっての影響も報告されてきている。慢性疾患児・障がい児をきょうだいに持つ高校生を対象とした榎野・大嶋 (2003) の研究でも、表面的な適応の良さに関わらず、障がい児や慢性疾患児のきょうだいへの支援体制の整備が望まれると指摘しており、患児だけではなく、きょうだいをふくめた家族支援の体制をどう構築していくのか検討していく必要があるといえるだろう。

一方で、これまでの研究は障がい児・者のきょうだいを対象にしたものが多く、障がい種別の研究は数も少なく偏りがあり、特に小児疾患患児とそのきょうだいに関する研究は散見される程度である。同胞が、日常生活を送るのにどの程度支障があるのかという自立の程度によっても影響を受け (Orsmond & Seltzer, 2007)、同胞の障がいの程度や障がいによる固有の影響、きょうだいの生活状況をふまえた詳細な内容など、今後明らかにしていく必要がある (川上, 2009) といえる。

障がい・疾患種別ときょうだい関係

発達障がい児のきょうだい

発達障がい児者とそのきょうだいを対象にした研究は近年増えており、中でも自閉症スペクトラム症 (Autism Spectrum Disorder; ASD) 児者のきょうだいに関するものは多くみられる。ASD児者のきょうだいは他の障がいのある子どものきょうだいよりも難しい経験をする 경우가多く (Harris, 1994 遠矢訳 2003)、社会性やコミュニケーションの障がいによって兄弟姉妹間の親密性や向

社会的な関係が乏しくなり (Kaminsky & Dewey, 2001)、感情表現を抑制する (Orsmond & Seltzer, 2007) ことや、家族に生じる慢性的なストレスによりきょうだいの適応に支障をきたす (Fisman et al., 1996) ことが指摘されている。

ASD児のきょうだいは幼児期の早い段階において「同胞の障害の気づき」を経験しており (富永・松永, 2013)、柳澤 (2005) は自閉性障害児のきょうだいに対する面接調査の結果の中で、未就学のきょうだいは生涯に関連した特性や発達の遅れを単独に認知はしていないものの、同胞の対人関係上の困難性はすでに経験の中で意識されていたことを明らかにしている。また、田倉・辻井 (2015) はASD児のきょうだいを対象とした研究において、幼少期から学童期にかけて、きょうだいが同胞と一緒に遊ぶ事など「関わることの楽しさ・親しみ」をもちながらも「漠然とした障害理解」はあり、何となく同胞が「普通とは違う」ことを感じていたとしている。このような「同胞の障害の気づき」に対し、きょうだいは「自然な受け止め」をした者と「同胞に対する違和感」を抱いた者とに分かれた (富永・松永, 2013)。

学童期になると、他とは異なった同胞の特性や能力的な遅れに気づき (柳澤, 2005; 田倉・辻井, 2015)、同胞の障がい特性ゆえの問題行動が理解しがたいものに映ったり (柳澤, 2005)、同胞のことで周囲にからかわれることへの恐れ (柳澤, 2005; 田倉・辻井, 2015) を感じたりするようになってくることが報告されている。一方で、同胞との関わりの蓄積の中で、同胞の良い面を見出し、受容しているきょうだい例も報告され (柳澤, 2005; 田倉・辻井, 2015)、周囲の同胞への対応によって、きょうだいの障がい観が影響を受けること (立山・他, 2003) が指摘されていることを考えると、同胞の疾患による特性を理解し、長所を肯定的に受け止めることは、きょうだいの適応を支える可能性が示唆される。

慢性疾患児のきょうだい

慢性疾患のきょうだいを扱った研究は、わずかに小児がん患児のきょうだいに関する研究 (Walker, 1990; Murray, 1999) がみられる程度である。Sloper (2000) は小児がん患児のきょうだいに同胞の診断6か月後と18か月後に面接調査を行い、診断6か月後のきょうだいの98%が情報不足による混乱や両親からの関心の減少など、同胞の病気による負の体験があったと述べ、自分への罪責感や両親への怒り等の感情も語られた。診断18か月後には半数以下に減少し、助けになった体験として「情報」や「人間関係」等があげられた。病気や治療に関する情報は、自らの状況の理解に加え、友人からの質

問に答えるためにも必要だと述べられており、5%のきょうだいが、自身の感情や体験について両親や友人と話せる関係にあることが、状況を受け入れ感情を整理するために重要だと述べた、また、北村他(2001)はA群色素性乾皮症患児のきょうだいが経験した同胞に関する悩みとして、「同胞の障がい」、「同年齢の子どもからのからかいやいじめ」、「遺伝や患児の将来についての情報不足」などがあつたと報告した。

同胞が入院を必要とする場合

同胞が生命にかかわる入院を必要とする時、「常に非常事態で神経がピリピリしているような家の状態」(立山他, 2003)が生じる。幼少期の同胞が入院をするという体験はそのきょうだいに大きな衝撃を与えうするため、家族だけで対応するのは困難であり、精神的なサポートを含めた育児支援が必要である(立山他, 2003)。藤丸(2003)は、がん患児に母親が付き添って入院した場合の、親が患児のきょうだい姉妹に行った説明の内容と説明の仕方(態度)を検討している。大学病院に母児入院した退院後2年以内の母親18名に面接調査を行った結果、全例に説明がなされ、内容は親が認知した理解度に従ってなされていることが明らかになった。一方で、入院に付き添うことは全ての親が説明していたが、病名については説明していたのは24%であり、親の説明の態度は子ども中心の態度と親中心の態度の2パターンに分類された。その上で病初期における親の危機的な状況では、同胞にとって発達に必要な愛情が不足する場合も考えられることから、祖父母や友人などの身近なサポートが得られているかどうかを検討したうえで、きめ細かい介入が必要であるとし、親も子ども辛い状況にあり、親と子がそれぞれの心情を表出できるような関わりや、必要な場合には同胞の養育に対する社会サービスへの橋渡しなどの支援が必要であることを示唆している。また、佐藤・上別府(2009)は、小児がん患児のきょうだいの良好な適応のためには、正確な知識の獲得による不安や恐怖の減少のみならず、親からのサポート感や家族との一体感による孤独感の減少も必要であるとし、情理的支援としての「情報提供」と情緒的支えとしての「情報共有」という二つの側面を踏まえた上での、継続的な説明とその評価の必要性を示唆している。

情報提供と障がい受容

田倉(2008)は中度または重度の知的障がいのある同胞をもつきょうだいを対象に面接を行い、同胞を肯定的に認識するまでのプロセスについて検討し、モデル図を作成している。その中できょうだいは幼少期から保護的

役割を持ちながら「健常者同胞であればという願望」を持ち続けながらも、障がい者同胞との関わりの中で自分が同胞にとっての「兄弟姉妹」とであると認識し、自分と同胞との関係を肯定的に受容することを示唆している。田倉(2008)はきょうだいが障がい者同胞を肯定的に捉える過程は一直線ではなく、同胞の障がいの種類や程度、行動、思春期のきょうだい自身の心の揺れ、日常的な関わりのある方等が影響し、かつ社会的な要因や、結婚・就職といった個人のライフイベントも関連し、大きく揺れ動くことを示している。このように、きょうだいが同胞の障がいを受容し肯定的に認識するには、複雑な過程を辿り、様々な要因の影響を受ける。

周りから同胞の病気のことを隠されると、実際より悲観的な状況を想像して不安や恐怖が強まる(Houtzager et al., 2004)、はっきりと正確な情報を与えられ、自分や家族の状況を理解したきょうだいは不安が少ない(Hamama, Ronen, Feigin, 2000)といった指摘もあり、同胞の障がいや疾患についての正しい情報を知ることがきょうだいにとって重要であると考えられる。また、情報や知識の入手だけでない「話してくれること」への要望があつたことが報告されており(Murray, 2000)、情報提供それ自体がサポート的な働きをするとも考えられる。佐藤・上別府(2009)は小児がんを持つ子どものきょうだいへの説明をどのように行うのがきょうだいの適応にとって望ましいかを明らかにするため文献研究を行っており、きょうだいに医師もしくは支援を受けた親から正確な情報を受けることが情理的支援、また家族と情報を共有することが親からのサポート感や家族との一体感を得て孤独感を減少させることに繋がる情緒的支援として作用することを指摘している。情理的・情緒的支援の両方の側面を持つものとして、きょうだいとの情報のやり取りを大切にすることが求められている。

家庭環境ときょうだい

きょうだい支援を考える際には、障がいや疾患を抱える同胞とそのきょうだいとの2者関係だけを捉えるのではなく、家族の文脈の中で考察することが重要(Rivers & Stoneman, 2003)と言われている。Cleveland & Miller(1977)の調査では、きょうだいが健常であることにより親から期待される一方で、親役割を代行することも求められるという役割の葛藤が生じること、親から1人の子どもの注意を十分に向けられなかったことがきょうだいから語られており、きょうだいが受ける影響には親の要因が大きく関わっている。また、石崎(2001)は母親の精神的健康度を評価し、障がい児・難病児のきょうだいのPSC(Pediatric Symptom Checklist)得点との

関連を検討したところ、有意な相関が認められたことから、障がい児・難病児のきょうだいへの影響には母親の精神的健康度が関連していると報告している。また、立山他(2003)は障がい児が幼児期で育児が大変な時期に、家族の協力が少なかった家庭において、障がい児のきょうだいに授業態度の問題や不公平感の訴え、夜尿などの問題が生じたことを明らかにしており、親や家族の精神的健康の維持や負担感の軽減がきょうだいにとって重要であることを示唆している。Morgan(1988)は、感情をオープンにできる家庭で過ごすきょうだいは適応できていること、柳澤(2005)も、感情を抑圧させず吐露できるような雰囲気や日常的に家庭で作っていくことが求められると指摘しており、家庭でのきょうだいへの配慮や支援の在り方について、支援者から伝えていくことも有用となってくるであろう。

きょうだい支援に向けて

海外におけるきょうだい支援

海外において小児科領域におけるきょうだいの負担を指摘する研究が登場したのは1960年前後である。小児科医のHolt(1958)は、障がい児者を診療した際にきょうだいがストレスにさらされているのではないかと感じ、障がい児者の家族の抱える負担について分析を行った。また、Schipper(1959)はダウン症児と暮らすきょうだいの負担を予測している。その後、きょうだいの心理的な支援の必要性を主張する研究者が登場し、Graliker, Fishler, & Koch(1962)は、障がい児者の存在はきょうだいの人格発達に良い影響を及ぼすと述べた一方で、それは専門家がきょうだいに心理的な支援を行った場合に保持できると指摘している。さらに、Schreiber(1984)はきょうだいの情緒の健全な発達の危険性を危惧する親の要望を受け、青年期のきょうだいを対象に彼らの置かれている状況や思いなどについて話し合うことのできる機会を設けている。この活動をきょうだい支援の出発点とし、青年期のきょうだいに対する同じ立場のきょうだいと話し合う機会の提供、障がい児者について学ぶといった活動へと繋がっていった。慢性疾患児のきょうだい支援としては、1999年に国際小児がん協会がきょうだい支援のガイドラインを作成している(Spinetta et al., 1999)。

きょうだいへの心理社会的支援の代表的な支援プログラムの一つに、Meyer & Vadasy(2008)が開発したSibshopがあり、アメリカ合衆国ワシントン州シアトルを拠点に、世界各国で展開されている。他にも、ASD児者のきょうだい向けの書籍の出版(Rosenberg, 2000; 2001)や医学的情報提供を含むきょうだい向け介入プロ

グラム(Barrera, Chung, Greenberg, & Fleming, 2002)、特別な教育的ニーズを有する未就学児と家族に対する支援活動(Dodd, 2004)等、海外では公的事業を含め精力的にきょうだい支援が行なわれているといえる。

国内におけるきょうだい支援

国内では、平川(2004)のきょうだい教室の実施と定期的な報告がみられるほか、きょうだい会などの自助グループにおける取り組みが行なわれている。しかし、国内でのきょうだい活動の現状はきょうだい同士の親睦交流以上になり得ていない(玉井, 2004)、頻度が少ないために日常生活でのきょうだいの問題に迅速に対応することが困難であり(柳澤, 2005)、それぞれの関心や目的が異なる中で「きょうだい」であるという繋がりだけで集まってもセルフヘルプ・グループとしての機能は生じてこない(吉川, 2001)などの指摘があり、きょうだい支援の十分な体制が整っていないのが現状である。

まとめ

障がい児・慢性疾患児のきょうだいを支援するためには、患児を含めた家族全体をどう支援していくのかということが同時に求められてくる。柳澤(2005)は家庭でのきょうだい支援の必要性を示し、その支援者である親自身をも支えていくことがきょうだいへの支援の基盤を築く上で重要であると指摘している。立山他(2003)は、専門職の役割として、母親の育児への協力体制を把握し、母親の注意が障がい児に注がれがちであることを勘案した母親指導とサポート体制を築く必要性を指摘しており、楨野・大嶋(2003)も、親が健常児のきょうだいに十分配慮できるように支援することが不可欠だと述べている。小児科医療の中においても、患児の治療だけに重点をおくのではなく、患児と家族がよりよく適応的に生活できるように、家族全体をふくめた支援の体制を整えていくことが必要であり、きょうだいやその家族が置かれている状況の多様性に合った、「あくまで一律な提供とならない支援の枠組み作り」(大瀧, 2011)が整備されることが求められる。

付記：この研究は、日本小児科学会小児医療委員会小児療養環境小委員会の活動の一環としてまとめたものである。

文献

Barrera, M., Chung, J., Greenberg, M., & Fleming, C. (2002). Preliminary investigation of a group intervention for siblings of pediatric cancer patients.

- Children's Health Care*, 31, 131-142.
- Cleveland, D. W., & Miller, N. (1977). Attitude and life commitments of older siblings of mentally retarded adults: An exploratory study. *Mental Retardation*, 15(3), 38-41.
- Dodd, L. W. (2004). Supporting the siblings of young children with disabilities. *British Journal of Special Education*, 31, 41-49.
- Fisman, S., Wolf, L., Ellison, D., Bonnie, G., Freeman, T., & Szatmari, P. (1996). Risk and protective factors affecting the adjustment of siblings of children with chronic disabilities. *Journal of the American Academy of Child & Adolescent Psychiatry*, 35, 1531-1541.
- 藤丸千尋 (2003). がん患児と母児入院した母親の同胞への説明——説明に見られたふたつの態度——日本小児看護学会誌, 12, 43-49.
- Graliker, B. V., Fishler, K., & Koch, R. (1962). Teenage reaction to a mentally retarded sibling. *American Journal of Mental Deficiency*, 66, 838-843.
- Hamama, R., Ronen, T., & Feigin, R. (2000). Self-control, anxiety, and loneliness in siblings of children with cancer. *Social Work in Health Care*, 31, 68-83.
- 原 幸一・西村辨作 (1998). 障害児を同胞に持つきょうだいの適応に関する質問紙調査 特殊教育学研究, 36, 1-11.
- Harris, S. L. (1994). Siblings of children with autism: A guide for families. Bethesda, MD: Woodbine House. (ハリス, S. 遠矢浩一 (訳) (2003). 自閉症児の「きょうだい」のために——お母さんへのアドバイス——ナカニシヤ出版)
- 平川忠敏 (2004). 自閉症のきょうだい教室 児童青年精神医学とその近接領域, 45, 372-379.
- Hodapp, R. M., Urbano, R. C., & Burke, M. M. (2010). Adult female and male siblings of persons with disabilities: Findings from a national survey. *Intellectual and Developmental Disabilities*, 48, 52-62.
- Holt, K. S. (1958). Home care of severely retarded children. *Pediatrics*, 22, 744.
- Houtzager, B. A., Oort, F. J., Hoekstra-Weebers, J., Caron, H. N., Grootenhuis, M. A., & Last, B. F. (2004). Coping and family functioning predict longitudinal psychological adaptation of siblings of childhood cancer patients. *Journal of Pediatric Psychology*, 29, 591-605.
- 石崎優子 (2001). 障害児・難病児の同胞の心理社会的問題と患児が家族の心理面に与える影響——障害児・難病児の両親の神経症傾向ならびに心理社会的問題を持つ同胞の割合——メンタルヘルス岡本記念財団研究助成報告集, 13, 17-23.
- Kaminsky, L., & Dewey, D. (2001). Siblings relationships of children with autism. *Journal of Autism and Developmental Disorders*, 31, 399-410.
- 笠田舞 (2013). 知的障がい者のきょうだいのライフコース選択プロセス——中期きょうだいにとって、葛藤の解決及び維持につながった要因——発達心理学研究, 24, 229-237.
- 川上あずさ (2009). 障害のある児のきょうだいに関する研究の動向と支援のあり方 小児保健研究, 68, 583-589.
- 北村弥生・上田礼子・鈴木香代子・下平雅之・岩川善英・神山潤 (2001). 進行性発達障害児の同胞の自己概念と悩みへの対処方法——A群色素性乾皮症患児を例として——小児保健研究, 60, 35-40.
- Lobato, D. (1983). Siblings of handicapped children: A review. *Journal of Autism and Developmental Disorders*, 13, 347-364.
- 槇野葉月・大嶋 巖 (2003). 慢性疾患児や障害児をきょうだいに持つ高校生のきょうだい関係と心理社会的適応——性や出生順位による影響を考慮して——こころの健康, 18(2), 29-40.
- Mates, T. E. (1990). Siblings of autistic children: Their adjustment and performance at home and in school. *Journal of Autism and Developmental Disorders*, 20, 545-553.
- McHale, S. M., & Gamble, W. C. (1989). Sibling relationships of children with disabled and nondisabled brothers and sisters. *Developmental Psychology*, 25, 421-429.
- Meyer, D. J., & Vadasy, P. F. (2008). *Sibshop: Workshops for siblings of children with special needs Revised Edition*. Baltimore, MD: Paul H. Brookes.
- Morgan, S. B. (1988). Autistic child and family functioning: A developmental-family systems perspective. *Journal of Autism and Developmental Disorders*, 18, 263-279.
- Murray, J. S. (1999). Siblings of children with cancer: a review of the literature. *Journal of Pediatric Oncology Nursing*, 16, 25-34.
- Murray, J.S. (2000). Understanding sibling adaptation to childhood cancer. *Applied Nursing Research*, 13(3), 151-156.

- 西村辨作・原 幸一 (1996). 障害児のきょうだい達 (1) 発達障害研究, 18, 56-67.
- 大瀧玲子 (2011). 発達障害児・者のきょうだいに関する研究の概観——きょうだいが担う役割の取得に着目して—— 東京大学大学院教育学研究科紀要, 51, 235-243.
- Orsmond, G. L., & Seltzer, M. M. (2007). Siblings of individuals with autism or down syndrome: effect on adult lives. *Journal of Intellectual Disability Research*, 51, 682-696.
- Rivers, J. W., & Stoneman, Z. (2003). Sibling relationships when a child has autism: Marital stress and support coping. *Journal of Autism and Developmental Disorders*, 33, 383-394.
- Rosenberg, M. S. (2000). *Everything you need to know when a brother or sister is autistic*. New York: Rosen Publishing Group.
- Rosenberg, M. S. (2001). *Coping when a brother or sister is autistic*. New York: Rosen Publishing Group.
- 佐藤伊織・上別府圭子 (2009). 小児がんを持つ子どものきょうだいに対する「情報提供」と「情報共有」——きょうだいへの説明に注目した文献レビュー—— 小児がん, 46, 31-38.
- Schipper, M. T. (1959). Child with mongolism in the home. *Pediatrics*, 24, 132.
- Schreiber, M. (1984). Normal siblings of retarded persons. *Social casework*, 65, 420-427.
- Sloper, P. (2000). Experiences and support needs of siblings of children with cancer. *Health Soc Care Community*, 8, 298-306.
- Spinetta, J. J., Jankovic, M., Eden, T., Green, D., Martins, A. G., Wandzura, C., ...Masera, G. (1999). Guidelines for assistance to siblings of children with cancer: report of the SIOP working committee on psychosocial issues in pediatric oncology. *Medical and Pediatric Oncology*, 33, 395-398.
- Stoneman, Z., Brody, G. H., Davis, C. H., Crapps, J. M., & Malone, D. M. (1991). Ascribed role relations between children with mental retardation and their younger siblings. *American Journal on Mental Retardation*, 95, 537-550.
- 田倉さやか (2008). 障害児を同胞にもつきょうだいの心理過程——兄弟姉妹関係の肯定的認識に至る経過を探る—— 小児の精神と神経, 48, 349-358.
- 田倉さやか・辻井正次 (2015). 自閉症スペクトラム障害児者を同胞にもつきょうだいの心理——障害の程度によるきょうだいの心理過程の比較—— 小児の精神と神経, 54, 331-344.
- 玉井邦夫 (2004). きょうだいの問題の重要性和支援者に求められること 小沢三知子・山田剛一郎 (編) 実践障害児教育 (pp. 13-15) 学習研究社
- 田中恭子・吉崎さやか・桑原和代・平田美佳・増子孝徳・藤村正哲 (2012). 重症の慢性疾患児の在宅での療養・療育環境の充実に関する研究 厚生労働科学研究費補助金 (成育疾患克服等次世代育成基盤研究事業) 平成24年度研究報告書
- 立山清美・立山順一・宮前珠子 (2003). 障害児の「きょうだい」の成長過程に見られる気になる兆候——その原因と母親の「きょうだい」への配慮——, 広島大学保健ジャーナル, 3, 37-45.
- 富永恵美子・松永しのぶ (2013). 自閉症者の成人きょうだい——同胞との関係の変遷—— 小児の精神と神経, 53, 245-257.
- Walker, C. L. (1990). Siblings of children with cancer. *Oncology Nursing Forum*, 17, 355-60.
- 山本美智代・金 壽子・長田久雄 (2000). 障害児・者の「きょうだい」の体験——成人「きょうだい」の面接調査から—— 小児保健研究, 59, 514-523.
- 柳澤亜希子 (2005). 自閉性障害児・者のきょうだいに對する家庭での支援のあり方 家族心理学研究, 19, 91-104.
- 吉川かおり (2001). 障害児者の「きょうだい」が持つ当事者性——セルフヘルプ・グループの意義—— 東洋大学社会学部紀要, 39, 105-118.

(2015年10月28日受稿)

ABSTRACT

Discussion on the theme of sibling support in the pediatric field

Masako NAGATA, Mayu MITANI and Satoko KAWAGUCHI

On the front lines of pediatric health care, priority is given to the treatment of child patients, and support for the patient's family members including the patient's siblings has not been sufficiently considered. This study aimed to clarify how the sibling support has been done up to the present by reviewing the domestic and foreign research papers on adaptation and support for siblings of child patients in the pediatric field. The results showed that when there was a child patient with a disability or a chronic disease in a family, the sibling support should be done by appropriately supporting the whole family including the child patient at the same time. This review suggested the necessity of establishing a support system where child patients and their family members can well adapt themselves to their life, in addition to the medical treatment for the child patients.

Key words: sibling support, pediatric field, child patients.